

1924年 (大正13年) [20歳]

「辰雄日誌1924」No. 4 (5)

—— 1924年7月1日～31日 ——

小池辰雄

○1924年7月1日 (火)

快晴。起床、正6時。長針は天を、短針は地を指して正に一直線であつた。跳ね起きた。夜寝るときにひきかえて、朝は冷やかである。朝靄が深く深く立ちこめていた。今日の天気を告げていた。果たして日昇と共に気温はどんどん昇って行つた。水衣を例によつて衣た。後半の第1日が来た。夏の中に入つた。7月。何となく明るい感じのする月である。

『新生』を母上に読了してあげて嬉しくあつた。かかる書は永久に所持して読むべきものである。私の書のたしかに一つに数えられる良書である。書は無数である。読書の人の力には限りがある。故に良書を選んで読むべきである。

僕に於ては、宗教書より外に好きな書はない。宗教書が心靈の泉である。面白い書である。飽きない書である。小説にもなきにはあらねど、所謂小説中に僕は心の慰みを得ることが出来ない。今まで読んだ小説中で僕のなつかしき、僕の心を慰め、或いは清めてくれた書は、小学校の5、6年頃読んだ、世界少年文学叢書中の『小船長』それから『フランダースの犬』それから『黒馬物語』。中学に入つては、探偵小説ではあるが『シャロックホルムズ』それから『三家庭』『アンクルトムス・キャビン』『少年僧正』等であつた。やさしき良書である。『如何にして基督信者たるを得ん乎』(角筈パンフレット第1巻)をも母上によんで上げた。運動にまた例の如く庭の手入れと大工仕事。今日は、湯殿の洗面器を載せる台を作つた。無用とされてごろごろ転がっている木を集めて作るのが僕の大工仕事である。道具はかつて小学校の5、6年生たりしとき用いた木工の古道具である。鋸もカンナもかなりボロボロだが、そこに言われぬ切れ味がある。

白地の単衣を着て、真赤な着物の喜美ちゃんを抱いて買物に行つた。午後2時頃、六ちゃんが来られた。母上に書を読み。今日はルナンの『基督伝』の翻訳を読んで居られた。午睡をした。ねころんで読書をした。夕方、金森君とキャッチボールをした。夕飯後、神楽坂へ写真を受けとりに行つた。6枚中2枚成功、4枚は光線不足。井ノ頭公園、斎藤様のレン子さんの2枚の失敗したのは悲観であつた。喜美ちゃんを入れる。ツルシブランコを買つて来た。2円50銭は少々応えたが。帰りがけに斎藤様にお見舞と思つて、撫子の花を(鉢植)買つて来て、叔母様に差し上げた。9度の高熱が出られたそうである。

六ちゃんと明日、片瀬へ1日の清遊をなすべく約束した。随分暑くるしい。しかし明け方には丁度よい位である。2、3日前から蚊帳を吊り始めた。夜店で螢やすず虫を売り始めた。



7月1日、ああ今日は朝から感謝と歓喜と希望に満ち満ちた日であった。前半年の蹉跌も何も皆打ち忘れて信仰と希望に生きん。基督者の生命は永遠の希望にある。^{としなえ}「基督の如く」、これが唯僕のつとむべき一事。ただこれあるのみ。神よ、1924年に恵みあらしめ給え。アーメン。

○1924年7月2日(水)

曇。片瀬へ。朝食を認めて6時半、家を出る。7時20分、東京駅着。天候は昨日ほどではないが、恵まれたものである。カバンの中には写真機とサージン1缶、生瓜1本、パン半斤、少量のバターと塩。これが僕のお弁当である。それに本は『詩篇の話』1冊。六ちゃんは先に来て待つて居られた。片瀬まで(藤沢)片道の切符を買う。汽車は空いている。横浜まで40分を要した。東京より遙かに復興の度がおくれている様であった。横浜からは50分、9時に藤沢に着いた。1時間半。

佐藤さんは痛快人物である。身なりなんかは全然無頓着な磊落^{らいらく}たる人である。車中の半分は眠って居られた。「僕は今朝は4時頃から眼がパチクリパチクリして睡眠不足だ」などと云って居られた。「田舎はいいなあ」とは共に共に発する言葉であった。「一つ今度はこの辺から通ってやろうかなあ」などと云って居られた。あまりに早く藤沢へ着いたので驚いた。靴をぬいでいたため急いでヒッカケて倉々として下車した。電車が待つて居た。大正6年「1917年」の夏を思い出した。

〔註：辰雄(13歳)は附属中学2年生のとき、兄政美(帝大法科1学年、23才)に連れられて片瀬海岸で一夏(1917/7/20～9/6)を過ごす。参加者は小池政美、吉原吉彌、青木三弦、青木喬、青木実、青木四郎、小池辰雄、武田宣彦。「……わが自らEpoch(エポック)(・)Making(メイキング)Summer(サマー)〔画期的夏〕と呼びし夏が語るところを聴こうと思う。この1917年〔大正6年〕の夏である。わが兄を大將^{オントイ}として親戚の男児等が片瀬に海童生活を営んだのは。これはわが少年時代の絶頂であったと云えよう。 (辰雄)「『羔』誌No.7より)〕

磯くさい風が車窓を通して吹き込む。快哉、また快哉である。片瀬川が来た。山本橋も眼前に来了。片瀬！ 片瀬下車！ 片瀬鰻頭！ 皆昔の思い出。山本橋へ戻って来た。この辺は僅かに昔のあとを止めているが、崩れたままの家がそこここにある。山本橋は全く落ちて今はただ人が通り得るだけになっている。

〔註：前年の関東大地震の時、津波が片瀬川を遡上、山本橋やほとんどの家屋は崩壊し、海岸は1m近く地盤が隆起したため砂浜の面積が拡がる〕

橋上の六ちゃんを撮った。和歌でも作れるなら作れたところだろうが。それから道を松林中に辿ったが、昔、皆で一夏を送ったあの家は影も形もない。ただ松がもの淋しげに立っているのみである。砂丘を上った。見事な砂である。くずの葉が這っていた。海！ 海！



それは7年前、心ゆくまで楽しみし海である。その広い砂浜！　ここでまた写真を撮った。水天髣髴としている。富士連山も今日はただ杳然と霞ようぜんんでいるのみであった。さて砂丘をかけ下りた。海へ足を入れた。実に何とも云えぬ感じ。ほてった足に、なつかしの海水、ささやかな波、佐藤六ちゃん一弁護士も子供である。海の子である。「泳ごう」と云うわけである。その清き、青き、温かな海。どうして僕をも誘わずに居よう。海より山の方が僕の身体によいと云うが、泳ぎ好きの僕、跳び込まないで居れようか。ぬれ袋には、水禪とさる股と水帽とがちゃんと用意してある。跳びこんだときの感じを何と云ってよいであろう。「ああ、大きい兄さん」と云うのであった。兄上の最大快楽は泳ぎとでも云おうか。この海、何年もここに鍛えた兄上の筋肉逞しい赤銅の身体をその砂浜上に思い浮かべて再び、

「ああ、大きい兄さん」

と祈り、呼び求むれども声はなし、姿はなし。我が涙は海水に、その滴は海水を沸かしさえさん熱さ。神よ、奇蹟は今なきかと祈れども、ああ。

心ゆくばかり泳いだ。この間から泳ぎたい泳ぎたいと思っていた希望の達せられたこと。しかもそれが片瀬の海に於て。何たる本望ぞ。神様どうも有難とうございます。6枚の写真皆撮ってしまった。日はおぼろであつたが、海は暖かった。二人の外、誰人も泳いでいない。地曳をやっていた。丁度あがるところ。鰯いわしやわかし「小さいサイズのブリ」が沢山かかっていた。澆刺たる魚とはこのこと。ぴんぴんしている。7尾のわかしを買った。1尾5銭、安価である。六ちゃんは蓄性を發揮した。なまのぴんぴんしたやつを手もてビリビリひきさき、血のしたたるやつをむしゃぶりついた。「さしみの極上」である。これにはさすがに驚嘆させられた。片瀬川を徒渉した。小雨が降りだした。江ノ島の棧橋を渡って江ノ島へ入り込んだ。二人ともいい格好である。「何を衣んと衣のことを思い煩わ」ざる人である。最もらくに感ずるままにボタンをはずし、シャツをゆるめて。帽子には海の塩と砂と。面も頭も塩くさく、砂はこびりついたまま。側の土産屋の店員らが「ヘイ、イラッシャイマシ……………」をやっていた。洞窟まで行こうと思ったが少し遠すぎるのと雨が降っているのですそれはやめた。太平洋の見晴らしのよき茶屋に腰かけて、例のおべんとうをたべた。実にそのうまさ云わんかたなしであった。六ちゃん、さざえの壺焼をとって下さった。パンに鯛に生瓜。それより片瀬町へ出て、六ちゃんは昼食を。まぐろを二人ぶん(寿司)おとりだったが、僕は一つも要らぬと云つたら、とうとう皆平らげられた。一寸驚嘆。六ちゃん、なか折の古びたのを(おまけに今日は砂までつけて)横つちよかぶり、左手には、さるまた入りの手拭い丸をぶらさげながら、足を無造作になげだして、かぶりついて居られた。1ヶは一口である。目は白、黒である。空腹をよほど感ぜられたらしい。ときどき「ウーイ」とうなつてはお茶を喫して居られた。それから片瀬停留場へ戻り、片瀬饅頭をお土産に求め、鎌倉行きとした。

片瀬、七里ヶ浜、稲村ヶ崎、長谷。長谷で途中下車した。一寸、海岸へ出て休み、大仏



参観に行く。目はとろとろ、足はぐでぐで、二人ともだらだらとした足波で辿りつく。地震で、尊顔は少し前方にかがんで居られた。実に柔和なお顔である。平安はかかる顔にあるなれと思わしめられた。もどつて海辺へ出た。少し休んでいるうちに、また泳ぎたくなつて、再びふんどし。片瀬の波よりは少しきたないが愉快だった。午前に午後に泳いで、心の満足言わん方なく、つかれもねむけもすつとんでしまい、意気揚々たりであった。

電車に乗り、涼風を切つて、鎌倉駅に至る。鎌倉、あの鎌倉も今はさびれている。栄枯盛衰の一端を目の当たり目撃して、現世の無常、よるべなきをしみじみと感じた。僕はどこまでも動きなき千代経し磐に！と思つて、基督教、聖書と思つた。神、主イエス、と仰ぎ見た。発車まで5分、いい時に着いたと二人で顔を見合わせて、今日の万事都合なりしことを喜び、神に感謝した。5時6分発、発車。少しまどろみ、後は読書。日没ややすぎて着京。

「何だつてこんなに、こんな所に人があつまるんだ、人つてばかだなあ！」

などと、丸ビル近辺をぞろぞろあるく人を見て六ちゃん。水泳で空腹を感じて、六ちゃんはおかねてからの竹葉の鰻を御馳走してくださった。すいつくようにうまかった。すてきだった。それから、アイスクリームを食べると、森永の喫茶部へつれて行つて下さった。ことわつては折角飲みたい六ちゃんが遠慮してお飲みにならないと思つて、ついて行つた。二人ぶんな来た。僕の所へ置かれた皿をも六ちゃんに上げた。六ちゃんも

「そんならいただきましよう」

と、今となつてはいたし方なしと云うわけでペロリなめられた。これで皆よい事をしたと思つて、目の慾に惹かれて飲んだよりはるかによい氣持がした。夕食後、冷飲料をひかえんと思つたからである。六ちゃんに多謝しておわかれした。実に愉快な一日を送つた、とお互いに嬉しくてたまらなくて、松住町でお別れした。

帰宅8時頃。早速、かの魚を3尾に、片瀬を添えて、斎藤様へお土産に持つて行つた。お見舞い申し上げたら叔母様は下熱されおよろしい由。嬉しくあつた。レン子さんにはキシヤゴのお土産をあげたら大よろこび。壽子さんには、星の方をした貝のメダルのお土産。ここちよき入浴をして、土産話をすまて、嬉々、感謝の中に就床したのは10時少しすぎ。熟睡。母上は僕の非常な今日の喜びを喜びとせられて、本当に自分自身が嬉しかったかの如く、喜んで下され誠に涙が出るほど僕もまた嬉しかった。ああ泳いだ。ああ面白かった。ああ有難いである。

○1924年7月3日(木)

晴。起床6時。斎藤の叔母様の御見舞に行く。赤司様へ母上をお伴れして行く。グンドルト先生を御存じとのこと。蜂蜜とイチゴジャムのことをうかがう。独逸の児童に盛んに与えているとのよし。午睡の効を聞き、早速やる。よい氣持。今日などは真夏の暑さ。神

楽坂へ時計と写真とバタの用で行く。写真は2枚成功。大工仕事をやる。湯殿の石鹼台をつくる。夜の10時半、兄帰宅された。

○1924年7月4日(金)

晴。暑い。母上も行かれるはずであったが、用が急に出来たためやめられて、僕だけ。8時半に出る。万世橋のりかえ、押上、京成電車にのる。運転手台のすぐ側に席をとる。風をビュービュー切って涼しいこと何とも云えぬ。時々、海が見える。心地よき電車。谷津海岸で下車。磯くさい風が吹いて来た。泳ぎたいこと！やけて、てりかえず、砂ほこりの道をすこし行くと、向こうから貞ちゃんと礼ちゃんが来た。迎えにである。僕が独りで来たのに一寸驚いた様な顔付のその笑顔の中に、読まれたのは、おかしい様な、お気の毒な様な、母上の来られぬを残念がつて居られた。叔母様も意外な調子であったが、やがて僕のために大いに款待の気を傾けられた。

涼風颯々の南面のお家、坐ながらにしてこの風、家に夏知らずである。お昼はあつさりといただく。午後から海へ行くが、ここはあさり、蛤の採れるところ。泳ぎには適しない。そこで海水の満潮時に溜まった池の様な所を見つけて、ここに半時の快を、河童遊びに貪った。うなぎの御馳走になる。涼しい風と涼しいかわづの声とお守りされつつ静かに就眠した。

○1924年7月5日(土)

晴。早起。井戸側で冷水摩擦。頭が真から冷える心地。何といっても井水。水道の水はお話にならぬ。朝食前、礼ちゃんと散歩。海水は満ちて、見渡すかぎりの大海。干潮には広き広き大グラウンドである。水上飛行機が朝靄を縫って飛んでいた。貞ちゃんと礼ちゃんを伴れて、舟を漕ぐ。礼ちゃん、恐がつて一周で已む。それからまた泳ぐ。実に愉快である。僕はどうしても泳ぎが好きだ。水の子である。河童である。水泳するたびに、泳ぎずきの長兄を思い出す。どんなに泳ぎたいことであろう。それから、次兄もすきだ。

井戸水をかぶったら、流石に顫^{ふる}えた。唇が青くなつた。お昼はすきなごまじるとじゃがいも、僕の注文である。生^{なま}うりやキャベツのほとんど生のやつや、何でも野菜の新鮮なそのままの天然の味が一番好きである。お菓子の如きは駄目である。肉類もさほどのまない。お魚は新しい奴はよいが、野菜類には及ばぬ。果物は可である。

吉彌様が丁度、午睡をしているところへ帰つて入らつしやつた。勲六等瑞宝章をこの度、戴いていらつしやつた。お目出度うをいう。これと、叔母様のお誕生が昨日であったが、両方を兼ねて今夜は御馳走であった。新鮮な鮪^{まぐろ}のおさしみ、えびのお羹^{あつもの}、えびとこはだの酢のもの、あじと色々で、鮪のおさしみが一番うまかつた。入浴。散歩をした。実に涼風にはこれをうんと肺の中へためこんで、東京に持つて行きたい位に思った。螢が飛んでい



た。一匹採つて礼ちゃんに上げる。草の中に入れて飼う様にしてあげる。トランプの9回戦、非常な接戦で愉快だった。10時すこし前就寝。

○1924年7月6日 (日)

晴。また、好い天気である。7時半に起きた。ひるねをして、海へ行つた。吉彌さんと礼ちゃん、蛤と蟹をとり。僕も一緒に行つたが、目的は泳ぎに。半里ほど干いている。往復1里、ヘバツタ。おかげ様でおなががペコペコ、じゃがいもを7つも食べたにはおどろいた。ごはんは2杯。僕としては非常なものである。午後3時、お暇。蛤とおいもをお土産にして。随分重かった。入浴、9時にねる。お医者様にも御相談せずに泳ぐことすでに4回。而して身体の具合は誠によし。

僕が真に目醒めたのは7月1日からであろう。僕自身は誠に無力、而して力の絶大なるもの、人の動かすべからざる絶大なる力が僕をとらえ、僕を支配して下さった。それが一時にあらず、継続的である。故に僕の身体に大なる影響を及ぼし、僕を新たに生まれしめてくださるのである。1924年の後半年をして願わくは最も御恵と御力と御光とを顕著ならしめて、神の栄光をあらわしたまえ。

唯一事。基督の如くその希望の光にのみ我が眼を向け給いて、歩ましめ給え。アーメン。

○1924年7月7日 (月)

晴。かんかんとて夏の日。気温は日ましにじりじりと上昇である。南先生の木挽町の病院へ行く。8時半。番号は32番。急診と云うのがあるために、待たされること3時間、11時半にやつとお診察を受ける。「非常によくなった。大変よろしい」と繰りかえし言われてうれしかった。泳いだことを申し上げたら、おどろいて居られた。そして、もう少しあとになつてからの方がよいでしょうと言われた。おくすりを戴いて出て来たのが12時半。片瀬行きの写真、六ちゃんとの記念写真、案の定、1枚しか成功していなかったが、その1枚が非常によくとれたので満足した。あとは光線不足。とてもあんなに曇つていてはと思つたのである。母上からうなぎの御馳走になる。

午後から山本へ行く。5時頃ついた。郊外は風がちがう。風通しがよい。入浴して、兄さん、姉さん、義雄さん、富美ちゃんと6人で夕飯をいただく。隆さんは急に昨日から下痢でねていて、可愛そうだった。

郊外のきれいな空を通して、親しき星を仰ぎ見たとき、色々の思い出がまた浮かび出て、ああ「慕うところは天に在り」であつた。

○1924年7月8日 (火)

晴。まるつきりいい天気。11時頃から泳ぎに行く、井ノ頭へ。少し冷たいが思ったほど



でない。愉快だった。樋口、水の子、河童、河馬君にあった。彼は実に水に強い。4月から泳いでいると聞いて驚嘆した。泳ぎはうまい。僕もクロールをならいたくなった。練習しよう。夕、5時頃、お暇してきた。あの風には名残惜しくて帰るのがいやになった。それから、その井戸水にも恋々たるものである。

夕方、六ちゃん来られた。斎藤さんへ遊びに行つた。ボートや、色々の絵はがき、見せていただいた。四郎ちゃんが来られた。就寝10時。

○1924年7月9日(水)

晴。非常に暑かった。水風呂へ入ること3回。しかしこれは身体によくないと思うから止めることにした。大工仕事を一つやつた。それは涼み台である。相当なものが出来た。これで家にあつた木を大抵つかつてしまった。利用もこれくらいやればよい。

お中元とやらが始まつた。一言、排めよ、と言いたくなる。暑いのに物品を買いに行き、贈答の札をなす。そこに何の意味があるのだろうか。無駄な事と言うよりほかに名のつけようがない。はんぶんじよくれい繁文縟礼である。一体、平常でもとくに珍しいとか、何とか云うものを心を以て贈るのなら、誠に有意義のことであるが、そうでない限りなるべくよすがよいと思う。

○1924年7月10日(木)

晴。暑い。10時頃、家を出る。山本へ立寄らんと中野で途中下車をした。生瓜を1本に卵を1個に、パンを半斤買って山本へ行く。隆さんは病気がなおつた。安心した。いきいきした子供の顔を見てうれしかった。その買物でお昼を認めた。姉さんもこの簡便なお昼に感心していた。井戸水をザアザアかけて涼しかった。井ノ頭へ泳ぎに行つた。1時から4時頃まで居た。泳ぐ者は、日が影るとブルブルだが、納涼しつつ見物する者は涼しそうな気。扇つかつているが不思議な位、コッチは涼しすぎる。これなら大丈夫と、着物を着ればまだ相当な暑さである。帰宅、読書。

○1924年7月11日(金)

晴。母上と吾妻様へ参る。御中元に。佐伯様へも伺う。おみき様の御親切に感謝する。なかなか暑い。母上は暑いと返つてお腹がよく食欲がおりになる。

○1924年7月12日(土)

曇後晴。水戸へ出発。午前は幸に曇つて車中も涼しくて有難かった。午後からは暑かつたが、桐寮をあげつばなして、一人、大の字になつて寝ころがっていたら涼しくあつた。井戸水は何とも云えぬよい気持である。夜も八畳に一人、悠々たるものであつた。



○1924年7月13日(日)

晴。午前、桐寮に独居。午後、友達と共に大洗へ行く。日中徒歩、相当暑い。水浜電車の中でよい気持ちに居眠りをする。大洗下車。大洗ホテルへ行く。相当ある。海に面した、風通しのよい、角の23番室に身をなげだして海をながめたときの好感たらなかった。その中に、休息もすんで散歩に浜へ出かける。大きなヒラメのとれているのを見た。アジが沢山とれていた。男気たつぷりのアンコーも居る。帰ってから入浴、夕飯。実に何とも云えなく美味であった。海を見ながら、海風に吹かれながら、而も明月が海上にのぼっているではないか。何と云つてよからう。

徴兵のことなどはすっかり忘れて、避暑客気分である。11時頃まで海岸でお月夜である。金波銀波とはこれ。

○1924年7月14日(月)

晴。4時半起床。寝衣のまま海辺へ飛び出した。朝霧が海面低くたれこめて四囲は朦朧としている。時に東天海上に夢の国の如く、また画の如く浮かび上つて来たものは何であるか。我が生命の泉なる太陽である。旭日である。知らず識らずうなだれて拝まざるを得なかった。6時少し前、朝食を認める。実にうまい。

いよいよ徴兵である。高等学校生30、40名一団となつて磯浜小学校へ行く。随分またされたが、それほど飽きないうちに番が来た。そのまゝに、学力試験とて国語の解釈があつた。随分馬鹿げた文章、しかもこれが徴兵検査のときに壮丁〔註：明治憲法下で、徴兵検査を受ける義務のある満20歳の男子。徴兵検査受検義務者を「壮丁」と称した〕に解釈せしむべき内容であるかと思つたら、実になさけなく実に当局の愚と思想の廃頽しているのに驚き嘆かざるを得なく、答案を書くささいやであつた。12時までには僕は済んだ。

貧弱な体格のため、或いは侮辱の言、或いは同情の語、或いは励ましの句を頂戴した。最後の断定は丁種不合格である〔註：丁種とは、「目・口が不自由な者、精神に障害を持つ者」との基準で、「兵役に適さない」に区分される〕。不忠不孝の壮丁は僕である。体格は丁種である。己れの不節制より損じて、そして得たるものは丁種の体格であると思うときに、自分は生きていく心地がしない。

最大の罪人、重大罪人は我。罪人の首領。僕は断然、身体を鍛え上げる。1924年大正13年の後半をして最も有効ならしめなければならぬ。

1時20分、菊野司令官の訓辞終つて旅費2円を受けとつて早速帰つた。電車にかつかつ間に合い、水戸まで一気に来る。のどが渴いたのでうりを1本かじつた。桐寮まで自動車。荷物若干を齊えて、早速水戸駅へ歩行。日中をぐんぐん歩いた。汽車におくれること5分、実に残念でたまらなかつた。時間変更で7分はやくなつていたのであつた。ために1時間余り待たされたが、気をとりなおして、安々と駅でひるねをとつた。4時47分発。土浦へ



着くころは月もかなり高くのぼり、やがて日没。

真赤な真赤な太陽、今朝はその姿を海上に、今夕はその姿を西山に、なんとよき太陽を見たことよ。愛する太陽、純紅の太陽は僕のために熱烈なる愛の光を投じてくれた。そして僕の将来のために祈ってくれた。

夜8時すぎ上野着、丁度いいのがあったから夏帽を買って帰った。10時、色々の土産話をして就寝。

○1924年7月15日(火)

晴。起床6時半。午前、家に居る。午後、三越へお約束の椅子を買いに行ったところ、生憎皆、約定済でだめ。丸善へ行く。一寸本をかう。教文館へ行ったら今日はお休み。がっかり。半蔵門へ行く。この椅子屋もお休み。九段下で聖書辞典と7月号『聖書の研究』をかう。今日は兄上の第30回の誕生日である。そのよき記念にと思って。また、我が靈魂の復活のために祈りつつ。

今日はお昼におはぎを10食べた。大きい兄さんのおすきなおはぎを。而も今日は僕が一人気呵成にねりついたのである。好評噴々^{さく}であつた。聖書を読み、庭に独り出でて、月下に長き祈りを捧げた。就寝10時半。

○1924年7月16日(水)

曇。午前11時頃、出掛けた。下平様にお中元のお使いで。それから半蔵門へ行つて、母上に差し上げるべき長椅子(組立式)を買った。母上様は、眼が悪くから、自由に避暑にもいらつしやれない。それで僕がせめても椅子の気持ちのよいのをと買って、このよき此の頃の記念にと差し上げることにした。毎月のお小使の15円から3円宛減じて5ヶ月、丁度、今年一杯でそれが買得るだけの金高になるのである。3円の節約をしてであるからなおさら嬉しい仕事である。明日とどくのが待たれる。

斎藤様に午後から遊びに行く。自製のアイスクリームの御馳走になる。カーネーション2缶に、卵3個で15人分のアイスクリームが出来るとのだから、はるかに経済的であり、かつまた安全で気持ちがよい。しかも味が実に今日のはすてきであつた。

源平碁「オセロ」をした。第1回は残敗、第2回は苦戦して勝った。第3回は、斎藤叔父様をみな殺しにしてしまった。バルチック艦隊の全滅である。全盤、真赤になった。日本万歳である。日の丸64個である。自分ながら予想外の勝利にこれはこれとばかりであつた。源平碁始まって以来の出来事である。奇蹟である。しかも相手は強敵叔父様である。戦は決勝戦である。夕方、金森君とキャッチボールをもりもりやって心地よかった。その前に自転車に乗るの遠乗を40分位やってお腹はペコペコ。お豆腐一丁はペロペロ、うどう一束もスルスル。



肉のことを思い煩わば死なり。霊のことを思うは生命なり。ただつとむべき一事に専心にして、神様はすべてのことをよくなして下さる。僕はどこまでも神様の赤子、神様にすがつてのみ独立し得る赤子でありたくある。

○1924年7月17日 (木)

晴。割合に涼しい。お寺へお中元に行く。本郷肴町から三丁目まで散歩した。『聖書の研究』を10冊買った。古いのがあって嬉しかった。寝たのは10時。午前、母上の椅子がとどいた。非常に喜んで下さって僕も買って上げた甲斐があり嬉しくあった。

○1924年7月18日 (金)

晴。今日は風がよく吹いて涼しかった。運動をしてあせを流した。きみちゃんが大変な御機嫌で非常に笑った。こんなに笑ったことはなかった。赤ん坊ずきな僕はやはりあやす事がうまい。愛の心を以てあやせばやはり無心の赤兒にもうつるものである。讃美歌の練習をやった。今日位の暑さなら避暑は無用である。

○1924年7月19日 (土)

晴。両国では川開きと云って、景気をつけるとかで花火をぽんぽん揚げて居る。一瞬時に100円、200円と煙になって行く。去年の震災に死せし人々の河底にあるを知らざるか。何たる人の心ぞ。この金も利用の仕方のものである。人の心は水の泡の如くある。丁度、パーアツと笑う花火の様である。瞬間的である。

十八の月、六ちゃんと散歩をした。斎藤様の二階で涼んだ。木星がアンタレスの傍で白光輝々としていた。火星が赤々と月の傍に侍していた。夏のなつかしき星々が僕の心をあらってくれた。

○1924年7月20日 (日)

晴。真夏の気温である。風が吹いているので割合に楽。書籍の整理をする。7月、恵まれたる7月は3分の2すぎた。

我最早生けるにあらず、キリスト我にありて生けるなり。

アーメン。唯一事を務む。

○1924年7月21日 (月)

晴。風が吹いて家中ざらざらである。壽子さんが今朝、富山のお国へ帰省された。金森君とキャッチボールをした。『聖書の研究』の古いのを讀んだ。



○1924年7月22日(火)

晴。今日も風が烈しい。随分暑い。兄上の日である。松本の三井さんから送って来た吹雪杏をお供えした。宇都宮から送って来た鮎は残念ながら虫が湧いていた。頭のない商人である。この暑中に、半やきで臓腑をださないで送る馬鹿があるかである。銷夏しやうかの読物として宗教書の如きよきはない。リンカーン伝を繙き、『聖書の研究』を見、The Pilgrim's Progress「天路歷程」を母上に読んでさし上げる。毎日毎日の自分の為すべきことに忠実に勤むときに言われざる平安がある。信仰によるその日暮らしの有難さよ、平安なることよ。

○1924年7月23日(水)

晴。暑気やや烈し。日中の銷夏法としては読書、風呂の水(昨日の)あまつたのを庭に打って涼を納れた。母上は例の藤椅子をよろこんで居られる。僕のために、腹巻を編んで居て下さる。

○1924年7月24日(木)

晴。昨夜の夢は何であるか。よくよく考えて汝の深刻なる誠とすべきである。神の明らかなる御示しである。神の聖旨である。神の御誠めである。如何にかかる夢を突然見たのであるか。僕は眼がさめるとすぐ左を見た。母上は安らかに眠って居られた。僕は平伏して祈りに祈った。深く感謝した。涙を以てお詫び申し上げた。

深刻なる夢。「愚なるものは母の憂なり」を示された。讃美歌439番を思い出した。

母上のこの世の旅に居らるる限り、その旅のなぐさめを与えるべきは僕である。故に全力をあげ全霊をこめて母上にお仕え申さねばならないのである。

母上よ、ゆるし給え。古き辰雄は去れり。今より辰雄は新しくある。キリストによりて新しくあります。

「我最早生けるにあらず基督我にありて生けるなり」

の信仰によりて。アーメン。

深刻なる夢よ、汝は夢にして夢に非ず。否、我が肉眼に開けるとときより勝りてたしかなる真実なるものなり。神の鋭き御黙示である。感謝に満ちて。

○1924年7月25日(金)

晴。午後1時頃、兄上帰宅された。夕方、一家で散歩した。物干台の上で涼んだ。星がすてきだった。なしうりの冷やしたのはすてきだった。睦まじき平和なる一家が作られたつある今日この頃が感謝である。神によりて結ばれてのみ家は平和である、幸福である、健康である。今晚は非常にあつくある。



○1924年7月26日(土)

晴。昨夜はあつくて七転八倒のさわぎである。毛布と喧嘩である。Christianity「キリスト教」とは何とよき宗教なることよ、私にとりて。つくづくその有難さと、神の聖旨のはかり知れざる偉大さと熱愛とに驚くばかりである。キリストと十字架、これありて何も要らぬである。全然何も要らぬである。何も要らぬ、何も要らぬである。

午前9時頃から支度をはじめた。11時半に荷物が出来上がった。午後から買物に行った。三越牛込分店へである。お昼は美味しいあじさを皆で戴く。昨日赤司様から戴いた蜂蜜でパンを戴く。天然の花の蜜を集め集めて得た汁と思うと、働いた蜜蜂にお礼を言いたくなる。天然の甘味、香味、実に美わしい貴重品である。午睡を少しした。晩御飯はまた皆で賑やかに戴く。

8時少しすぎ、母上と握手して、お互いに健康と平安とを祈りつつ、いさぎよく「行つてまいります」をした。

この夏は恵まれたるものなり。神の御恵を自らそこねること勿れ。かたく信仰に立て。信仰のよき戦を戦え。節制、沈着、快活、規律、運動、読書。これにてすべては可である。而してすべてが愛のもとに。

上野駅では改札口に御一番槍、生まれて初めてである。10時10分発車。汽車はそうこんでいない。西側に席をとった。兄上と姉上と喜美ちゃんと僕。喜美ちゃん、驚くことばかりであろう。あつけにとられた様な顔をしている。すべてが普段とかわっているので妙であろう。そのうちに眠ってしまった。お乳をすいながら。時々、眼覚めてはあたりをみまわしていた。それでも、兄や僕の顔はあたりの人と見分けがつくらしく、ニヤニヤと笑っていた。走る車窓から南冠を初めてながめた。星の研究をひらきつつ。あるいは眠り、あるいは星をながめ、扇はつかわなくてもよい位、楽である。ただ眠りが十分とれないのが一寸不快な位で、夜(夏の)の旅としては楽な方であろう。碓氷峠は実に爽快、窓から首を出して只管その涼気に接した。また機罐車にかわったときは悲観した。すべて電気機関車だと汽車の旅も愉快であろう。

浅間は朝霞の中に杳^{よう}として墨絵の様である。払暁の田舎の景色をながめつつ、昔を偲びつつ、兄上、姉上と語りながら、篠ノ井へ来た。ここで三人と別れた。兄姉は信濃鉄道の沓掛まで姉のお里へである。

長野で顔を洗って、朝食をしたためた。お弁当を皆平らげたので、少々こたえた。田口駅へ着いたのは8時一寸前、約10時間の汽車である。徒歩で来るところ、自動車に乗ってしまった。2円とは驚いた。汽車の3分の2である。こんな贅沢はするつもりでなかったのがこんなことになってしまつて癪だった。

赤倉、高宏の土地、完全に避暑地である。妙高クラブは半分、貴族的な香のする別荘みたいところである。僕みたいなHumble「質素」すぎな平民的な人間はかえって避暑気分



を減さねやしないかと思うけれども。

十分ひるねをして、キャッチボールをやった。溪川の水を慕って30分ほどの散歩をした。30秒、否、10秒も手を入れてはどうかと思うほど冷たい水である。それを飲んだときのステキさ。あたまを十分冷やした。うぐいすの鳴き声が手にとるほどのところに聞こえて来る。草や木が潤色である。大気は清澄である。就床前、入浴して眠る。つかれていたので忽ち就眠。10時であつた。

○1924年7月27日(日)

晴。朝、6時に起きて、温泉場で顔を洗い朝湯をつかった。朝食6時50分、朝食2杯。お昼前に運動を1時間した。11時の昼食にはくらつた。キャッチボールや散歩をした。溪川の水は実に清冽であつた。山椒の木がブンと鼻をついた。夜の星は見事である。

○1924年7月28日(月)

晴。午前6時起床、午後4時頃、斎藤様御一同が来られた。賑やかになった。1号館、3間を通して6人である。井本さんが来られればもつと賑やかになる。方々へ葉書を書く。少々お腹が変である。

写真①、午後2時頃、1号館居間の前より袴岳遠望、田口駅。快晴。Brilliant、25分の1。

○1924年7月29日(火)

晴。お腹が少し痛んで下痢した。朝食はとつてもとらなくてもよかったので、ほんの少しにして置いた。大いに散歩でもせんと思つていたのに遮げられて悲観した。お湯によく漬かった。午後から展望閣へ皆で行つて眺望をした。涼んだ。実に雄大な眺めであつた。それから裏の山へ上つた。野尻湖の青色を見てはたまらなくなった。蕨を大分集採した。帰つて来て、キャッチボールをした。夜は、帝大の文科3年生呉と云う人と4人でトランプをする。入浴して寝た。

写真②、午前6時、温泉場側の道より妙高山をとる。Clear、25分の1。

さて、汝は太らざるべからず。太らんと欲せば万事一擲せざるべからず。それ、基督に在りて初めてなさるることなり。故に、

Abide in Christ. Like Christ.

〔キリストの中にとどまる。キリストの如く〕

I died, I live no more. Christ liveth in me.

〔私は死んだ、最早生きていない。キリストが私の中に生きている〕

誠にかくして日々を歩ましめ給え。アーメン。

○1924年7月30日 (水)

晴。明治天皇祭。起床6時。入浴。散歩。写真③、写真をとる、東南小高いところから黒姫山2053、と飯縄山1917を。Clear、25分の1。

午前、Like Christを読む。四郎ちゃん、帰京。点呼で。午後、キャッチボールをしたり、鞦韆しゅうせん「ブランコ」に乗ったり、山にのぼったり、泰ちゃん暴投して2個紛失す。合計4個の球を藪の中に入れてしまった。「球ほうり」に行こうではなくて、「球なくし」に行こうである。夜の星は実に何と言つてよいかわからない。兄上を思う、この夏の夜の星々を仰いでは。

○1924年7月31日 (木)

晴。起床6時。泰ちゃん眠つて居る。野尻へ行こうと思うが、気の毒だから起こさなかった。神経衰弱で朝が眠いとのことであるから。赤倉温泉場の最上部、道の中央にある浴場へ入りに行った。岩の間から温泉が瀧となつて落ちる様になっている。下は深いところと浅いところとある。誰も来ない。ただ一人である。外からは朝日がうつすりと指す。草木の涼しそうな景色が浴場からながめられる。瀧にうたれたり、ねころんだり、よき朝湯をつかった。朝食を認めて室へ帰る。日々の仕事にとりかかる。天気が非常によい。野尻湖が東南に瞥見される。彼は呼ぶが如くある。「泳ぎたいなあ」それは僕の毎日、あの湖とこの天気とから発する言葉である。今日もまた然りである。断然意を決した。時に8時半。泰ちゃんに同意を求めた。泰ちゃんもまず行きたい方であつた。20分で支度が出来て、出掛けたのは9時5分前、10時46分の汽車に乗らんとするのである。道は1里12、13町、段々不安になつて急いだ。随分ある。とうとうしまいにかけだした。10時43分に駅着である。汗ただく。ところが生憎、今日から時間改正である。10時35分発、間に合わざること8分である。きわどいことは、するものではないと思つた。それから休憩した。11時半に及んだ。考えた。歩いて行こうかと。しかし、お腹がすくのと、泳ぐためかえりのへばるのを考えて、止めることにして、駅前のさくら屋で昼食をとつた。ねっころがつた。1時9分の汽車で柏原へ行つた。乗じた。日中はかなり暑い。道は遠い。すこしまごつく。遠回りをしたため、1里近く歩いた。やつと湖面の見えるところへきたときの心地つたらなかつた。湖！湖！生まれて初めての湖、それが今入ろうとする湖である。やがて、「きそば」の看板のある旅館を3、4、通りすぎて、やがて湖畔に出た。

幸に1小ボートが繫留してあつた。早速借りて乗り出した。少し曇つてはいるが、湖面は穏やかである。湖水は冷たいと聞いていたので、おそろおそろ手を入れて見たところ、案外、温かである。「シメタ」と云つて、僕は早速、水褌一本となつた。ボートは二人が一方によると転覆しそうである。一度、さぶつとばかり、水をかぶつた。飛び込んだ。実に何とも云えないイイキモチ、心ゆくばかり泳いだ。クロールの練習もした。泳ぎはいい運動である。林檎2ツ半に妙高団子5ツは実に美味しく食べられた。琵琶島へと二人で漕いだ。



すぐ着いた。ヨットが実に文字通り水上を滑っていた。写真に入れたがどうも琵琶島の宇賀神社のと重複したらしくて悲観している。

④琵琶島を立崎野尻村湖畔より、25分の1、GrayとClearの間位。⑤湖上のヨット、25分の1、ClearとBrilliantとの間。⑥宇賀神社、うすぐらい。B、2秒くらい。

素足で水褌にシャツと云う姿で宇賀神社に参拝。誰もいない。お御籤を引いた。泰ちゃん、先ず引く。「末吉」と云うのがあたった。僕は次に引く。「大吉」と云うのがあたる。一つにはおかしく、一つには馬鹿らしい様な、とにかく吉の字がついているので気持はよい。それから、島をボートで一周した。南側はトロロンとしてしかも透明底の真砂が数えられる様である。小魚が群をなして泳いでいる。僕はまた跳び込んだ。相変わらず、よい気持、「すてきだなあ」を連呼しつつ泳いだ。5時少し前に引き上げた。帰りは近道を一廻おうなに導かれて来たので、はやく着駅した。行きの道は、かつて大正3年「1914年」7月30日より8月2日の間に於て亡き兄上が戸隠山より下つて、野尻に遊ばれたとき通った道である。懐かしき昔よ。その足跡は何処。あの活発な快活な兄上ともっと旅行がしたかった。

神経衰弱と云う今日の友とかく歩くのは不愉快である。彼の足に元気がない。彼の眼はとろんとしている。彼の言辞は高慢で放埒でだれている。彼はだれた、あくびな妙な音声を発す。あわれむべき彼である。その原因はどこにあるか。僕は断言して憚らぬ、それは「汝の心霊のくされるに在り」と。汝の霊にして目覚めんか、総ては一新する。

しかして、之また僕に於ても然りである。神よ、我が心霊を一変せしめ、兄の霊を注ぎて、辰雄は新しき辰雄ならしめ、常にあの政美兄上と共に在らしめ給え。そこに我、ゆたかなり、活発なり、沈着なるを得るのである。我に、幸に龍二兄上あり、彼と残るこの世の旅を、政美兄上の霊に導かれて歩まん。我等は皆、基督エス様の枝なり。アーメン。

20分の暇を得て、斬髪ずきの僕はとこ屋へ飛び込む。生まれて初めて五里刈り「丸刈り」をやった。ちょこちょこつとすつてもらった。田舎のとこ屋は正直なもの、

「すりかたがあらかったから15銭でも貰つて居きましようかね」

と云う。東京では、すつてもすらなくても50銭。15銭とは東京の何時の値段だろうか。戦前の値段である。彼の正直を愛した。「どうもありがとう」と言う言葉は僕の口から送らざるを得なかった。気持のよいのはここにある。人の心にある。彼の伎倆にない。装飾にない。停車場でタンクから溢れる水であたまと顔を洗った。がらがらに空いた汽車に乗った。泰ちゃんは名物「生そば」をすった。

田口駅着、日は西山に暮いた。空は反映して、あたりはまだ明るい。1里余の道を歩くのは相当であつた。しかし、夕方の風いだ涼しい山の景色をながめつつ、細路を草を分けつつのぼり行くは心地よきものであつた。田舎田舎、山の中山の中、と思つた。青い草ほど僕達の心を清くしてくれるものはない。

天然の野菜に対する愛好はいやました。菜食は益々僕に適して来たようである。人工よ



り天然、技巧より自然、天然自然の摂理、神の法則に適う様に生きたいものである。不自然、思い煩いてなすこと、これ最も害あることである。

神は我等の必要な事をすべて御存じであり、且つ与え給う。故に自然の則に従って、なすべきことをなして、何をせん、何を衣ん、何を食わんと思ひ煩うなかれである。

夕暁の空は次第にうすらいで、夜の色にうつり行き、星の涼しい瞬きが、あちこちに現われて来る。赤倉温泉場の灯火がチラチラと見えて来る。我等が家についたときは、妙高山は真黒な影を描いていた。入浴して、空腹を満たすべく食堂へ行く。ただ一人。感謝のうちに食事は最も美味しくいたたく。再び入浴、土産はなしをして、寝る。9時半。

一汽車おくれざるを得なかった。斎藤様に御心配をかけたのはすまなかった。

7月もついに今日で逝く。もはや月日は我が数うるところにあらず。ただ主の命にのみ従いてこの世の旅を送りて、神の聖国、我が本国に往かんのみ。すべての望み、すべての歡びは彼処に在り。アーメン。

